

指定

【 1 】

津山市指定重要文化財（令和2年3月19日）

- 1 種 別 重要文化財（工芸品）
- 2 名称及び員数 しゅうるしぬりほん こぞねたくぼくいとおどしどうまる ぐ そく 朱漆塗本小札啄木糸威 胴丸具足 1領
- 3 所在地 さんげ 津山市山下 津山郷土博物館
- 4 所有者 個人（津山郷土博物館寄託）
- 5 製作年代 江戸時代前期（17世紀）
- 6 寸法 胴高39.3cm 兜鉢高20.5cm 大袖高39.0cm
- 7 説明

本甲冑は、津山藩主松平家に伝来したもので、日本甲冑の諸形式では安土桃山時代に出現する当世具足とうせいぐそくに分類される。当世具足は、兜・面具・胴・袖・籠手・佩楯・臙当かぶと めんぐ どう そで こて はいだて すねあてで構成される。

兜は、ヤクの毛を赤く染めた赤熊しやぐまで表面を覆った変わり兜で、このような意匠の兜を「唐の頭」とも言う。胴の本体は、朱漆塗の小札を絹の啄木組（白・萌黄・焦茶）の組紐おどで威している。胸板などには、金蒔絵で越前松平家の家紋である葵紋と巴紋を交互に配し、各所の飾金具にも葵紋があしらわれており、徳川家との強い関係を示している。また、胴の草摺と大袖、佩楯は、いずれも金小札に紫・白・紅の色々威とした華やかな仕立てである。

各部の特徴から、本甲冑の製作時期は江戸時代前期（17世紀）と考えられる。その時期の松平家の当主は、徳川家康の次男・結城秀康ゆうきひでやすとその嫡男・松平忠直ただなおの2代にわたる。松平家の記録によれば、関が原の戦い（1600年）の直前、結城秀康は父・徳川家康から甲冑を拝領しており、その記述と本甲冑の特徴がよく一致する。

ただし、胴の金具廻など細部の形状から、製作時期は関が原の戦い以降と考えられる。近世大名家においては、歴史的な勲功をあげた先祖が使用していた甲冑を、後世の藩主らが模して作らせる事例が見られる。よって、本甲冑は、秀康が拝領したものを意識しつつ、全体の意匠に示されている通り、徳川一門に準じる高い家格を象徴する武具として作られた可能性が高いと考えられる。

なお、本甲冑が収められている鎧櫃の中には、采配1点が入っている。采配には、白いヤクの毛が使われており、本甲冑と揃って用いることを想定した可能性もある。また、江戸時代後期（19世紀）の本甲冑の状況を記録した古文書2点も入れられており、江戸時代を通じて越前松平家の系譜を引く津山藩松平家の什宝じゅうほうとして大切にされてきたことがわかる。

本甲冑は、江戸時代前期まで遡ることのできる大名家伝来の甲冑として極

めて貴重であり、美術工芸品として優れているだけでなく、歴史的資料としても価値が高い。

【 2 】

- | | |
|----------|---|
| 1 種 別 | 重要文化財（考古資料） |
| 2 名称及び員数 | 恩原 ^{おんばら} 1遺跡・恩原 ^{おんばら} 2遺跡 出土石器 ^{いせきしゆつどせつき} 1,049点 |
| 3 所在地 | 岡山市北区津島中 |
| 4 所有者 | 国立大学法人岡山大学（学長 榎野博史） |
| 5 製作年代 | 旧石器時代 |
| 6 説明 | |

苫田郡鏡野町上齋原に所在する恩原1遺跡・恩原2遺跡は、岡山大学考古学研究室を中心とした恩原遺跡群発掘調査団により発掘調査が実施され、平成22年にはその一部を含め「恩原遺跡群」として県指定史跡に指定されている。本資料は、恩原1遺跡・恩原2遺跡で確認された旧石器時代に属する4つの文化層から出土した石器群の一部である。

恩原1遺跡・恩原2遺跡の発掘調査で明らかにされた4つの文化層は、古いものから順に、R文化層（約33,000年から28,000年前）、O文化層（約27,000年前）、S文化層（約25,000年から20,000年前）、M文化層（約18,000年から16,000年前）と名付けられ、それぞれに特徴的な石器類が出土している。R・O・S文化層はナイフ形石器によって特徴づけられ、他に石刃^{せきじん}、スクレイパー^{だいきい}、台形石器、石器製作の素材である石核^{せつかく}などで構成される。そのうちS文化層には、後期旧石器時代後半期において主に瀬戸内沿岸地域で盛行した「瀬戸内技法」による石器群が含まれており、同地域との関係が想定される。また、旧石器時代末期に位置づけられるM文化層は、細石刃^{さいせきじん}によって特徴づけられ、その製作工程を示す細石核^{さいせつかく}や削片^{せくへん}なども含む。特に注目されるのは、東北日本を中心に分布する「湧別技法^{ゆうべつ}」による細石刃石器群である。さらに新潟県荒屋^{あらかや}遺跡出土資料と類似する「荒屋型彫器^{ちようき}」なども伴っており、同時期における東日本とのつながりが確認できる。

これらの石器に使用された石材は、自然科学的分析による産地同定調査が行われたものもあり、中国山地にも多く産出する水晶のほか、香川県などに産する安山岩^{あんざんがん}（サヌカイト）、島根県松江市産の玉髓^{ぎよくずい}・瑪瑙^{めんのう}、島根県隠岐産の黒曜石^{こくようせき}、東北・北陸地方に産出する珪質頁岩^{けいしつげつがん}などが認められ、石材においても他地域との関係がうかがえる。

以上の石器類は、旧石器時代の生活様式のみならず、遠隔地との文化的交流あるいは直接的な人間の長距離移動を復元できる資料としても重要であり、

特にM文化層の細石刃石器群は、東北日本で栄えた「湧別技法」が遠く中国地方まで南進していた事実を初めて明らかにした点で特筆に値する。調査によって確認された複数の文化層から出土した本資料は、岡山県内はもとより西日本における旧石器時代研究を大きく前進させた点で、学術上の価値が高い。



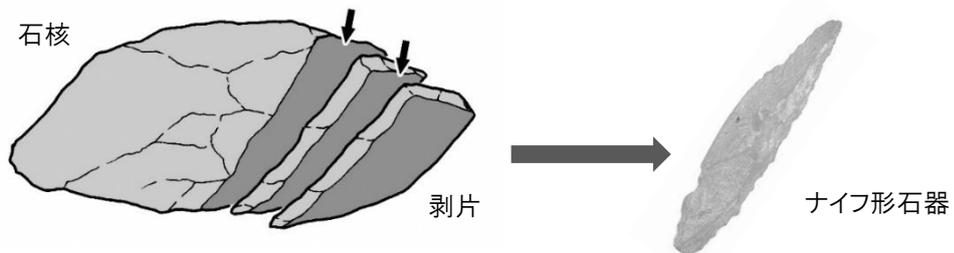
1 しゅうるしぬりほんこぎねたくほくいとおどしどうまるぐそく
朱漆塗本小札啄木糸威胴丸具足 1領〈個人所有〉



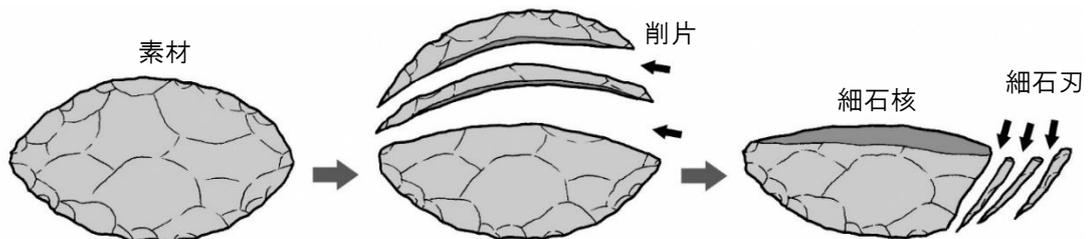
2 恩原 1 遺跡・恩原 2 遺跡出土石器

(左 3 点) S 文化層のナイフ形石器 (その他) M 文化層の細石刃石器群

○瀬戸内技法 (S 文化層) …… 主にサヌカイトの石核から横長の剥片を剥離し、ナイフ形石器などの素材とする技法。瀬戸内沿岸地域で盛行



○湧別技法 (M 文化層) …… 木の葉形の素材から、削片を剥離して打撃面を作り、細石刃を連続的に取る技法。東北日本で盛行

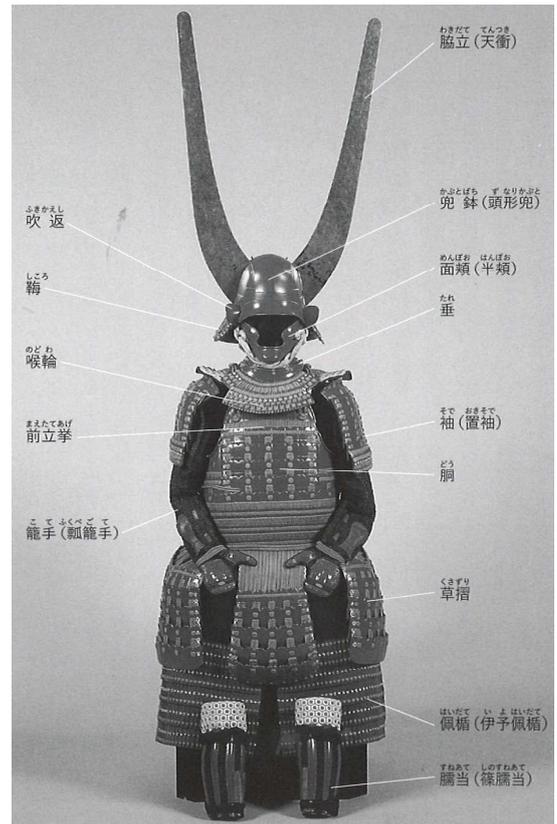


(語句説明)

ゆうきひでやす
結城秀康・・・天正2（1574）年2月8日生まれ。徳川家康の次男。母はお万の方（小督局）。天正12（1584）年豊臣秀吉の養子となり羽柴秀康を名のる。のち下総の結城晴朝の娘婿となり10万1000石を相続。慶長5（1600）年越前北庄藩（のちの福井藩）68万石に封じられ、翌年封地にはいる。権中納言。慶長12（1607）年閏4月8日死去。34歳。幼名は於義丸。

まつだいらただなお ぶんろく
松平忠直・・・文禄4（1595）年6月10日生まれ。結城秀康の長男。妻は徳川秀忠の娘勝姫。慶長12（1607）年13歳で越前（福井県）北庄藩主松平家2代となる。大坂の陣で真田信繁（幸村）を討つなどの大功をたてた。のち乱行や將軍家に対する不遜な行動がかさなり、元和9（1623）年改易となり豊後（大分県）萩原に流された。慶安3（1650）年9月10日死去。56歳。幼名は長吉。号は一伯。

とうせいぐそく
当世具足・・・室町末期以降、戦国時代に多く用いられた鎧の一式。槍や飛び道具から身を守るため、従来の胴丸を鉄板製とし、全身を覆うための籠手・脛当てなどの小具足を付加した。旧来の具足に対して当世具足と称したが、のちには単に具足と呼ぶようになった。



『サムライアーマー甲冑』（平成30（2018）年、岡山県立博物館より）

おんぼらいせきぐん
恩原遺跡群（県指定史跡・平成22（2010）年3月12日指定）・・・恩原貯水池周辺に広がる旧石器時代の遺跡群である。火山灰層が良好に堆積しており、4つの文化層が確認された。出土した石器の変化や特徴から、旧石器時代人の生活の移り変わりや、中国・四国地方だけでなく東日本の一部までを含んだ人の移動や交流が明らかになっている。